国総研セミナー・シリーズ
(94-3)

R6D9

ジェンダーと開発について

平成6年9月

国際協力事業団
国際協力総合研修所

JICA
000
214
IIC
LIBRARY

総　研
JR
94－68

ジェンダーと開発について

26642
JICA LIBRARY
1114920[0]

平成6年9月

国際協力事業団
国際協力総合研修所

国際協力事業団
26642

マイクロ
フィルム作成

「国総研セミナー」とは・・・・・

国総研セミナーとは国際協力事業団国際協力総合研修所において行っているセミナーの略称で、国内外の有識者、援助関係者により、わが国の国際協力にかかわる関係者を対象に開発援助の現状、課題、展望等の情報を提供することを目的としています。

本出版物は、講師の了解を得て講演の要約をまとめたもので、編集の責任は国際協力総合研修所にあります。

国総研セミナー

テーマ：ジェンダーと開発について

日　時：平成６年９月８日（木）１５：００～１７：００

場　所：国際協力事業団　本部（新宿三井ビル）５０Ｆ　５０１～３会議室

講　師：目黒　依子
上智大学文学部社会学科教授

（講師略歴）

1961	WESTERN COLLEGE FOR WOMEN　社会学部卒
1967	東京大学大学院社会学研究科修士課程修了
1974	CASE WESTERN RESERVE UNIV. GRADUTATE SCHOOL 博士課程修了
1971～	上智大学専任講師、助教授を経て現職

（専門分野）　社会学

（国際協力関係の経験等）

1970年代以降、草の根レベルの相互理解を深めるための講演活動を、ニュージーランド、アメリカ、カナダなどで展開。特に米国ジャパン・ソサエティや日本外務省主催のジャパン・キャラバンや在外公館主催の日本週間などで活躍する。

1990～1991	「開発と女性」分野別援助研究会　座長代行	（ＪＩＣＡ）
1992	開発と女性国際セミナー　講師	（ＪＩＣＡ）

（著書）

「主婦ブルース」（筑摩書房）、「女役割ー性支配への分析」（垣内出版）、「個人化する家族」（勁草書房）

【司会】　今日は、大変お忙しい中、理事をはじめとする管理職の皆様方にも参加していただき、どうもありがとうございます。今日は「開発と女性の援助研究会」の座長代行をしていただきました、上智大学教授の目黒依子先生に、開発と女性の最近の動向についてお話をしていただき、より深く理解してもらい、ＪＩＣＡがこのグローバルイッシューを進めるにあたってのサジェスチョンをいただきたいと思って企画いたしました。先生のご講演の後、聴講に来られた方にはご質問等をしていただきたいと思います。では、まず国総研所長の岩波より挨拶、および目黒先生の紹介をさせていただきます。

【岩波所長】　今日は、大変お忙しい中を快くお引受けいただきましてありがとうございます。事務局を代表しまして、セミナーの開催に先立ちまして、一言お話をさせていただきたいと思います。

本日のセミナーの開催の趣旨につきましては、いま司会のほうからお話がございましたように、ＪＩＣＡといたしましては、平成元年から２年にかけて援助研究の一環として、「開発と女性（ＷＩＤ）」のテーマを取り上げました。従来、ＷＩＤに関しましては、予算面、組織面、そして実績面ということで、着々とこのイッシューにかかわる成果を上げてきているわけでございます。研究面におきましても、この「開発と女性」という援助研究を皮切りに、「ＷＩＤ配慮の手引書」といったものも出来上がっておりますし、「農村生活改善のための女性の技術向上基礎調査」といった調査も行いましたし、「社会林業へのＷＩＤ分析手法の導入研究」というものも行われております。

そういった状況ではございますが、現在、ご案内のように、日本がこれから、さらに国際社会においてより積極的なイニシアティブを果たしていくという意味におきましては、開発問題のほとんどの側面にかかわりを持つＷＩＤ、このＷＩＤの重要性というのは、ますます認識されているわけで、私どももこれからの更なる、本件の取組みの強化ということを考えます際に、是非、改めてこういった機会を設けて、このイッシューにかかわる本質、原点といったものを体系的にお話を伺い、そして意見交換をするということは、非常に意義があろうとい

うことで、本日のセミナー開催に至ったわけでございます。

目黒先生のことについては、もう紹介にはおよばないというふうに思いますが、先生はウェスタン・カレッジ・フォー・ウィメンをお出になった後、東京大学の大学院で社会学の修士課程を終えられ、さらにケース・ウェスタン・リザーブ大学で博士課程を終了しておられます。爾来、長年にわたりまして上智大学におきまして、ジェンダー一筋に、教育面、研究面で大変な実績を残しておられます。もちろん著書も多々おありになるわけでございます。

私どもとの関連は、先ほどもご案内がありましたように、この「開発と女性」の分野別援助研究の臨時座長代行をお務めいただきました。座長でおられた高橋元デンマーク大使が急逝されましたので、その後をお引き受けいただいて、立派な提言報告書を取りまとめていただきました。実は、このような国総研セミナーという意味では今般が2回目になりまして、1992年にも私どもの在外機関長会議の一環として、やはり国総研セミナーの講師をお引き受けいただいた経緯がございます。

この種の話はこの程度にさせていただきまして、先生よろしくお願いいたします。

ジェンダーと開発について

上智大学
教授　目黒依子

どうも過分なご紹介をありがとうございました。ＷＩＤについて、私たちが分野別援助研究会を持ったころに比べましたら、最近はＪＩＣＡの中でも大変理解が深まり、またその理解される方々の据野も広まったというふうに承っておりまして、最初携わった者としましては、大変に心強く思っております。ただ、あまりにもＷＩＤ、ＷＩＤと言って、実際にはＷＩＤというのは何のことだかわからない。だから、それをプロジェクトでどういうふうに具体化していったらいいか、わからないという問題もありますので、ＷＩＤについての理解が広まった今、もう一度ＷＩＤとは何かということを確認したほうがいい、ということを私自身も感じておりましたが、ＪＩＣＡの方々にもそういう認識がおありで、大変いい機会だと思いまして引き受けました。

今日は、意思決定にかかわる重要なポストの方々を中心に、このセミナーが設けられるということで、それ自体は大変に重要なことだと私自身、常日ごろから言っているのですが、ただ今日の私の話が、何だかわからないとか、あるいはその結果、それじゃ仕様がないというふうなところにいってしまうと、これは大変ヤブヘビになりますので、もしそのような感じがしましても、マイナス効果のところはちょっと忘れていただいて、さらにプラスの指向で取り組んでいただけると大変にありがたいと思います。ただ、そうならないように最大の努力をいたします。質疑をしたほうが、実際にどこがわからない、どこが問題だということがはっきりするのでいいのですが、そこに至るまでに、ちょっと私が重要だと思われるポイントについて、お話をさせていただきたいと思います。

まず、レジュメの最初のところ、「背景」というところで、なぜＷＩＤとかＧＡＤというのが重要なイッシューとして出てきたかというところから入りたいと思います。もうすでにＪＩＣＡの皆様は、十分にご承知のところだと思いますが、国連を中心に

した動きとして、女性の地位向上運動というものがあります。それは、1975年が国際女性年、政府用語ですと「国際婦人年」というのが設けられました。その翌年、76年からの10年間を「国連婦人の10年」というふうに決めまして、その間に75年の第1回婦人会議から、中間年の80年のデンマークでの第2回会議、そして3回目の85年には、ケニアで第3回の会議がありました。そして来年、北京で第4回世界会議が開かれる予定になっております。

85年には、「国連婦人の10年」が設置された10年間に、世界の女性たちの状況がどうなったかということをレビューしまして、その結果を「ナイロビ将来戦略」という形でまとめたわけです。来年の北京の会議では、この「ナイロビ将来戦略」でまとめられたポイントについて、各国政府が、どこまで自分の国で目標を達成したかということを取りまとめて議論をする、というふうなことになっています。

75年にまとめられた「ナイロビ将来戦略」の内容というのは、大変厳しいものでした。それを特に、いわゆる開発援助政策との関連で見ますと、大体70年代にＷＩＤに関する検討、「開発と女性をめぐる検討」が始まって、それは結局、構造調整が行われたにもかかわらず、女性に対する視点がなかった。つまりは、ジェンダー・ブラインドだったというところから、開発と女性をめぐる検討が活発になったということです。84年には、ＷＩＤ専門家グループが結成され、88年には「ナイロビから2000年へ、ＤＡＣメンバーのとるべき行動」というものがＤＡＣでまとめられたわけです。ですから、この85年の「ナイロビ将来戦略」というのが、開発援助政策にも大きなインパクトを与えて、その援助政策に携わる人々の間でも、「ナイロビから2000年へ」という形で、援助政策に関してＷＩＤの視点を基本的に取り入れる、というふうな動きがあったわけです。

そこで、何が判ったかということなのです。つまり、「ナイロビ将来戦略」というのが大変に重要なわけでして、一体この10年間、開発援助が進められた中で、どういう事態に至ったのだろうということをまとめてあります。私自身のまとめなのですが、「ナイロビ将来戦略」というのは膨大なものですので、その中で一応結論としてどういうことが言えるか、ということを取りまとめてみますと、76年から85年の10年間に

見られた女性の状況、それを基にした今後の戦略テーマとして何を基本とするかといいますと、１つには、経済成長が自動的に女性に利益をもたらすという前提が疑問であるということ、２点目が、女性の地位向上に対する構造的な障害の克服が必要であるという点、この大体２点に、大まかにまとめられるということでした。構造的な障害というのは、政治・経済・社会・文化的な諸条件ということを指しているわけです。

特に途上国で、その10年間に何が起きたかというところで、言葉としては耳に馴染みがない言葉かもしれませんがそのまま使いますと、近代化過程における職場と家庭の役割を担うという女性、これが女性にとっては二重負担であるということ。言い換えますと、近代化過程で見られた職場、それは職場における女性の役割というのは、市場生産の場に女性がリクルートされたということです。もう一方で、家庭の場でも重要な役割を担い続けている。しかし、その場を支配している原理は何かといったら、家父長制原理である、という言い方が見られるわけです。

ですから、女性の二重負担というのは、特に経済開発が進むほど、女性の負担が増えたということで、何もこれは途上国に限らず、世界共通のことなのです。日本などでも、当然同じようなことが言えるわけですが、女性が家庭にあって重要な役割を担うということは変わらないままで、市場労働の世界にリクルートされていったということが、この近代化の過程であって、それは女性にとっては二重負担になってきたということが１点です。

また、特に途上国に関して言えること、これも話を広げますと、開発が進んだ国でもそういうことが言えるのですが、２番目は、近代化過程において、女性の地位はどうなったかというと、地位はむしろ低下したということです。それはどういうことかと言うと、女性は常に働き続けたけれども、経済システムの変化によって、メインワーカーからサブワーカーに、地位が低下したということです。それは労働市場の効率主義、世界経済構造における新しい植民地主義、こういった下で、女性の二重労働、二重役割負担というものが、女性の労働の質を低下させ、女性の労働の評価を低下させたというふうなことを、ここで言っているわけです。つまりは、市場労働が発達する以前には、女性たちは、自分たちの生きる術を持っていた。いわゆる伝統的な生産

の仕組みの中で、女性たちは重要な働きをしていた。ところが、市場経済が入り込んでくることによって、女性の持っている労働に対する評価というものが低下したということなのです。

2番目は、家庭内労働という労働が、無償労働である。したがって、社会的にもこれは低い評価を得るということです。女性の地位が低下したという意味の3番目としては、土地財産の所有権の喪失があるということです。

10年間に起きたことについての結論の3番目としては、先進国と後発国の間の南北格差の拡大が見られますが、特に女性に対してそれは悪影響を及ぼしたという点です。結局のところ、国の開発が最優先されたために、女性の地位向上ということについての配慮がなかったということ。ですから、プライオリティの問題だということです。女性の活動システムとか、財産権などが、むしろ周辺化されて、男性中心のシステムへの依存性が増大した、というふうなことです。固苦しい言葉が並んでいますが、こういうふうなポイントが、「ナイロビ将来戦略」でまとめられまして、各国政府は、こういう事態がよくなるような手立てを、次の10年間にやりましょう、やらなくてはならないというふうなことで、来年の北京会議でこのレビューが行われるということです。

こういうふうな背景がありましたが、別の角度から女性がどういう状況に置かれているかということを見る際に、特に最近ではジェンダー・イッシューというものが、環境とか人口、貧困などというものと同じように、グローバル・イッシューになってきたということがあります。グローバル・イッシューなのですが、その内容が少しずつ変わってきているわけです。10年前に比べて、いまはどこにポイントがあるかというと、まず最初に変わってきて、世界的なレベルでイッシューになってきた点は、生き方について、あるいはその意識についての変化が見られたということです。次に、開発の中での女性というふうなところで、グローバル・イッシューとして認識されてきたわけです。

女性が社会の中で、あるいは開発を論じる場合には、開発のプロセスの中で出てきた問題として、最初は制度的なものが中心だったわけですが、それが段々制度といっ

た形でない、内面的なレベルでの問題が出てくるようになりました。それを一括りにしますと、セクシュアリティの領域での問題だということです。セクシュアリティという言葉をお聞きになったことがあるかどうかわかりませんが、男性と女性の関係というところで、女の性、男の性というものを総称する言葉としてセクシュアリティという言葉を使います。例としては、グラスシーリング、セクシャルハラスメント、性暴力、戦争、リプロダクティブ・ライツ・アンド・ヘルスという言葉が使われて、女性と男性のセクシュアリティの問題、内面的な問題として表現されているということなのですが、これは途上国だけではなく、世界中の女性について言えることなので、取りあえずこういうものがグローバル・イッシューとして出てきたのだ、ということで紹介しておきます。

次に「基本概念」という枠組みのところに入りたいと思います。ＷＩＤだとかジェンダーだとか、いろいろな言葉が飛びかっていますが、まずその基本概念を確認したいと思います。レジュメに「sex role、gender role」という英語と「性役割、性別役割」という日本語が並べてありますが、日本語でセックスロールに対応するのが性別役割、ジェンダーロールに対応するのが性役割ということになります。一応、セックスという概念は、生物学的な性別、ジェンダーというのは、社会的、文化的に作られた性別という意味で区別しています。そういうふうに区別をしますと、それぞれの性に付いている役割はどういうものかということで、それぞれの例をその右側に挙げてあります。生物学的な性差に基づく役割というのは、生殖に関するもの、ほとんどこれに限定されると言ってもいいということです。主婦であるとか、家事をする人だとか、育児をする人とか、稼ぎ手というふうな人、こういう役割は、みんなジェンダー役割なのです。つまり社会的、文化的に作られたそれぞれの性に付いている役割だ、という意味でジェンダー役割というわけです。ここが１つ問題なのです。

国によって、文化によって、あるいは時代によっては、生殖と育児が区分できない、というところもあるわけです。つまり、母親は子供を産んで育てる、というところまではセックスロールだ、性別役割なんだ、というふうな考え方をしている社会がたく

さんあるわけです。日本も、どちらかというと、そちらに属するところです。途上国というのは、こういう考え方が強くあります。ですけれども、これは社会的、文化的、歴史的に作られた役割だ、というふうに分析できるわけです。稼ぎ手というのは、近代に入ってからできた概念だということです。男性が家族を養うのが使命である、家族を養えない男性は、男性性を持たない。だから一生懸命、何が何でも稼がなければと、それがお父さん役割だ、夫役割だというふうなのは、作られた観念なのです。生物学的な性別だけに基づけば、何もそんなことをしなくてもいい、ということになるわけです。

「性別役割分業」というのを次に挙げてありますが、これは分業にも平等分業と不平等分業があるということです。平等か不平等かという軸で役割を切りますと、そこには平等分業と不平等分業が存在するということです。これを具体的に言うと、労働対家族というふうな形での性別の分業が、往々に見られる、近代社会で特にその傾向が見られるということです。次に「ジェンダー階層」というのがありますが、これは分配の不平等によって階層化が生じた場合のことを言います。もう1つ「階級としての女性」という捉え方をしていますが、これは経済的依存と支配ということで、マルクス主義で一般に使われる階級という言葉を用いて、状況を表現しているものです。

そういう基本的な言葉を使いながら、男女の関係というものと、開発というものを考えていこうということです。開発の目的はそもそも何か、ということに立ち戻ってみますと、結局、開発というと経済開発だというのがずっとあったわけです。最近では、社会的、文化的な開発ということも取り入れるべきだ、という考え方が出てきているわけですが、まず経済開発といったときに、貧困からの脱却というのが大きな目標としてある。そのときに、どの程度つまり、どのレベルで貧困からの脱却ということを考えるのかということと、誰にとっての貧困からの脱却か、ということをきちんと確認する必要があると思われます。最も貧しい人々が、貧困から脱却するということが、経済開発の目的なのか。貧困社会の中でのリーダーたちにとって、都合のいい経済開発と考えるのかというふうな、つまり「誰にとって」ということが、きちんと整理されなければならない、という問題を含んでいます。

これは、受益者は誰かということになってくるわけです。この受益者は誰か、ということを確認する際に、いろいろなファクターが必要です。そのファクターの１つは、社会階層です。持てる者と持たざる者とか、ある程度持っている人々とか、上層、中層、下層というふうな階層が見られる社会もあるし、途上国の場合は、大半が上層か下層か、というふうな階層化が見られるわけです。

これだけではなく、特定の世代が受益する、ということも重要な確認事項だと思われます。世代というのは、私たちが考える場合には、どういう時代に生まれて育って年をとっているか、という歴史的なコンテクストが非常に重要になるわけです。つまり、どこかと戦争をしているときに生まれた世代、その人たちは若いころに、いろいろな意味で機会を剝奪されてきた。それがずっと尾を引いて、老年になっても、いろいろなチャンスのあるその次の世代に比べると、いろいろな意味で不利を被っているとか、いろいろなことがあるわけです。世代というのはそういう意味なのですが、これを言い換えると年齢ということになるわけです。ただし、何歳の人々というふうな括り方だけではなくて、その後ろに歴史的なコンテクストがある、ということを確認する必要があると思われます。

次が民族です。これは、ボスニア・ヘルツェゴビナなどを見ましても、なぜというふうな疑問が出てくるくらい、多民族社会では、こういうことが問題になります。重要なのが宗教です。こういったいくつかの変数が、受益者を特定する際、分類する際に必要になるかと思うのですが、ジェンダーを下に書いて、それぞれ線を引っ張ってありますのは、そのどの変数にも、このジェンダーというカテゴリーは重要になってくるということなのです。こういう書き方をしますと、私はジェンダー・リダクショニストだと言われるかもしれませんが、どの社会階層にも、２つの性が存在するわけです。どの民族にも、どの年齢層にも、どの宗教にも２つの性があるということで、こういう形でジェンダーというのは、特定の変数とか特定の領域というよりも、むしろほかの変数やほかの領域の中で、常にかかわってくる変数であるということだと思います。

では、最も開発プロジェクトにかかわっている方々が関心のある、開発の効果とい

う発想なのですが、やはり開発の目的を持った上で実施すると、その効果がどうであるかということが、当然、関心の的になってくるわけです。その際に、途上国を考えると、結局は、いわゆるネイション・ビルディングをやるプロセスにある社会が途上国であるとすると、国家を形成するプロセスで、何がプライオリティになるかという問題が出てくるわけです。その際に、独立国家の形成という大きなゴールと、受益集団の特定、そして受益集団の中での優先順位というものが、どういうふうにかかわるかということが、重要な問題になってきます。特に、エリート対民衆という特定集団、そこでの優先順位の問題、どちらのニーズを優先させるかという問題、また男性対女性という形で、どちらのニーズを優先させるか、ということが出てきます。往々にして、途上国の場合には、エリートのニーズが優先、男性のニーズが優先、というパターンが見られてきたと思います。

アメリカのある研究者の研究によりますと、独立国家の形成過程で重要な、国、社会の安定ということを考えた場合に、男性支配という形をとるのが、国の安定につながるということが確認される、ということを言っている人がいます。ネイション・ビルディングのプロセスで、安定した社会づくりを目指すときには、どうしても男性支配の構造を持った社会にするということが、ネイション・ビルディングを推し進めていく上で効率的だ、という研究があるのですが、どこまでこれが普遍的に言えるかわかりませんが、それが1つの原則として存在するので、途上国の開発プロセスにおいては、男性中心の構造というのは、崩れるどころか、ますます強化されてきた、というふうなことを言っているわけです。

もう1つは、もうちょっと一般的な発想として、コストと報酬という捉え方ができるわけです。これは、誰がどれだけのコストを支払うか。開発を進める中で誰が、つまりどういう集団が、どれだけのコストを払って、その結果どれだけの報酬を得るか。こういう見方をすると、いろいろなことが見えてくると思うのです。男性と女性に関して言いますと、女性はどの社会でも、たくさんの貢献をしているわけです。社会の安定とか発展とか維持に貢献をしている。いろいろな形で、女性は役割を担っている。しかしながら、それに対応した報酬を得ている社会がどれだけあるか。ほとんどユニ

バーサルに、我々が知っている研究材料を基にして、知っている限りでは、いずれの社会でも女性は、払っているコストの割に報酬は得ていない。これが公正の原理に反するということが、男女平等を目指す大きな理由になっているわけです。

コストの形は、男性と女性で違うわけです。ですから、違ったコストを払っているのだから、同じような見方で、報酬というのは考えられないのではないかというのが、男女はディファレント・バット・イコールということを言う人々の考え方なのです。それに対して、そうは言っても、いろいろな意味で女性は、支払いのほうが多い、もらうものが少ない、これはどう見ても不公平である、公正の原理に反するというのが、別の考え方です。だからディファレント・バット・イコールという考え方はとらない、ということになるわけです。

別の言い方をしますと、それでは誰がどういう形で、男性と女性がかかわってくるかを決めるのかという決定者と、その決定に従って実行する実践者との区別なのです。女性が決定者で、男性が決定サークルに入っていない社会はない。しかし、その逆は多いわけです。ですから、決定者イコール男性である。実践者、決定に携わらない人々の中には男性も入ってはいるが、女性はそちらのほうに常にいる、という状況なのです。ですから、普通の感覚で考えますと、決定者に有利なコストと報酬のバランスの仕組みができてくる、ということになるわけです。

では、不平等というものが、どういう構造になっているかということです。これがわからないと、何で平等ということが開発とかかわってくるか、ということがわからないと思います。不平等構造についてですが、ここで重要なファクターとしては、労働あるいは活動の分業構造が、１つ重要なファクターです。次に、権力構造というものがあるわけですが、この権力というのは、資源の配分で決まります。資源の配分というのは、資源の所有と、資源へのアクセスというレベルがありますが、結局その特定の資源を、どれだけ誰が持っているかということで、その権力の仕組みができるわけです。

男も女も、いろいろな活動をしていると言いますが、そこで価値付け、あるいは意味付けが入ってくる。これによって、男と女がやっている活動に、それぞれ異なる価

値が付与されて、資源としての重要性の違いが出てくるわけです。女がやっている活動の場合には、価値付けが低い。したがって、資源としての社会的な評価が低い。したがって、権力構造でいうならば、権力を持たないほうにくる。こういう仕組みがあるわけです。この価値付けは、どこから出てくるかというと、国家イデオロギーであるとか、宗教であるとか、慣習といったものが、この価値付けを行う働きをしている。

出来上がった権力構造、誰がその決定者であるかがそこで決まるわけですから、その人々にとって都合のいいような価値付けをするという仕組みが出来上がる。これが、この循環なのです。ですから、最初に言いました「国連婦人の10年」の間に、女性の地位がむしろ下がったとか、女性の過重負担になってきたというふうな実態も、実は女性がやっている活動そのものの量が増えたということによる、というのが大きいわけです。しかしながら、どんなにたくさんの活動を女性がするようになっても、女性がやっている活動のトータルな意味付けは上がらなかった。つまり、下がった部分も出てくる、というふうなところから、この権力構造へのインパクトが出てこない。ですから、いままでどおりの仕組みの中で、女性はますますたくさんの働きをするようになったわけですが、それに見合ったような報酬は得られなかった。それがこの不平等構造を何とか変えなければならない、という主張につながっていったということです。

では、活動とか労働とかの分業構造について、もう少し詳しく見ようというのが、５番の「労働の分業構造」です。ここで、特に性別分業を私たちは問題にしているわけです。労働には、有償労働（ペイドワーク）と無償労働（アンペイドワーク）とがある。大体二分されるわけです。有償労働に携わっているのは、男も女も両方です。それに対して、無償労働を担っているのは女である、というのが実態です。有償労働、無償労働、即生産労働、再生産労働と言えるかどうか、ちょっと疑問があるかもしれませんが、別の言い回しをすると、よく使われるのが生産労働対再生産労働なのです。ここで見ますと、生産労働には、男も女も携わっている。再生産労働には、女が携わっていて男は入らない。こういうふうな分業の仕組みがあるということなのです。ここが結局、現在存在する不平等構造と、大いにかかわり合いがあるということなの

です。

実は、医療の専門家にとって、再生産労働（リプロダクション）というと、生殖だけを意味するのです。出産だとか、出産にかかわるさまざまな領域、母親になるという捉え方で女性を見るわけです。女性は母である、という見方をするわけです。つまり、生殖に携わる性であるということで、女性は母である、だから母親としての環境を向上させるということを考えたときには、例えば子供と一緒に母子保健だとか、公衆衛生、特に母親にとっての公衆衛生というところで、そこだけをターゲットにするというふうな捉え方が出てくるわけです。生物学的な再生産というのは、それは生殖というところだけでいいわけですが、私などのように社会学をやっておりますと、生殖という部分は、再生産のごく一部である、というふうに常日ごろ見るわけです。もっと私たちが直接対象にしている側面というのは、社会的再生産なのです。これはどういうものかというと、家事とか育児とか、教育、健康管理全般、老人、病人の世話、そういった活動が再生産活動だ、というふうに見るわけです。これが１つ、重要な側面として挙げられます。

もう１つ、途上国研究、あるいは先進国の中でも、経済的に下層の人たちをターゲットにしている研究で、いみじくも共通して出てきているのは、女性たちのコミュニティ・マネージメントという側面なのです。女性たちは、経済的にもあまり力を持っていない。社会的な決定権も持っていない。しかし、女性たちは重要な家庭での、つまりさっき言った２番目の役割を持っている。社会的な再生産活動を担わされているわけです。それをどうやって担っていくかという問題が、貧困層の女性たちには、非常に大きな問題なのです。そのマネージメントの仕方で、コミュニティの中で、どういう他者とのつながりを持つか。つまり、親族の間で、あるいは近隣との間で、どういうふうなつながり方を持つかということが、女性たちのサバイバルの重要な手段になっている、という側面があります。女性たちのサバイバルの重要な側面だということは、子供たちにとっての重要なサバイバルのための活動だ、ということにもなるわけです。

さっき母子保健というような言い方を、ちょっと否定的なニュアンスで話しました

が、母親が子供たちの育成に責任があるという現実があって、父親は稼いできても、自分のお酒代だとか、ほかで遊んだりとか、そういうことに直ぐ使ってしまう。女性の場合は、何か収入があると、ほとんど必ずといっていいくらい、子供たちに食べさせる、というところにお金を使うわけです。それは、日本の母親たちを見ても似たような状況があるわけです。パートに行って得たお金を、どういうふうに使うかというと、自分のために使うということを最近の母親たちは覚え始めていますが、たいがいは放っておくと、まず子供の物を買うということをやるわけです。これは、まさしくジェンダーなのです。文化的、社会的に学習したジェンダー役割としての母親役割なのです。

そういうことが見られるので、もし父親が何も経済活動をしないと、母親たちに、子供たちを育てるという重要な責任がかかってくるわけです。そのときに、彼女たちはお互いに助け合う。親族の女性たちと、あるいは近隣の女性たちと、コミュニティの女性たちとネットワークを作って、いろいろな形での活動をして、とにかく生計を保っていくということをやっている。ですから、再生産活動そのものが、すべて無償であるということは言えないわけで、どういう形の報酬かというふうに見ると、それがサバイバルを維持していくという形の報酬につながる、という見方もできるわけです。しかし、一般的には、ペイドワークといったら、これはキャッシュを手に入れる活動だ、というふうに言われていますから、このコミュニティ・マネージメントというのも、再生産活動で、これは無償労働であるというところに入ってくるわけです。

次が「ジェンダーと開発」です。ここで、いよいよＷＩＤとかＧＡＤという言葉が出てきましたが、ウィメン・イン・ディベロップメントという言い回しは、まず最初に出てきましたから、一応、行政などでもＷＩＤということで一貫して使っているわけですが、内容がかなり変わってきていると言えます。その変わってきた内容を表現する言葉として、ジェンダー・アンド・ディベロップメント（ＧＡＤ）という言葉が、より使われるようになりました。むしろ、これは分析的な概念として使われる傾向が強いわけですから、何もＪＩＣＡが、急にＷＩＤというのをやめてＧＡＤにしよう、というふうなことをしなくても、もちろんいいわけです。国際的にそれは通用するわ

けですが、内容が変わってきたということで、ここで対応して、どこが変わったかということを見てみたいわけです。

ＷＩＤというのは、ウィメン・イン・ディベロップメント、つまり開発における女性、開発というのは、計画が男性の意思決定者によって行われた。その中に、女性も重要な働きをしなければならない、そのほうが開発全体の効果が上がるだろうということで、女性が果たせる役割はこういうものだ、ということをデザインされるわけです。その範囲内で、女性が役割を果たす。例えば、工業化をするというとき、工業化を効率よくするためには、効率よい生産をしなければならない。効率よい生産の重要な部分として、低賃金労働がある。低賃金労働をするのは誰か。再生産労働を担っている女性は、職業的な訓練が受けられない。そういう女性たちが、ローペイ・アンド・トレインド・ワークといったところに集中的に置かれる。

もし何らかの形で、女性をターゲットにした援助計画を考えるというふうになった場合には、女性は惨めな状況に置かれているから、少しでも良い状況に引き上げよう、衛生状況が悪いから、少しでも良い状況にしようということで、いまの状況よりも良い状況にする、全体の枠組みは変えない。これが福祉的なアプローチだというふうに言われています。困った人を助ける、かわいそうな人をレベルアップする。これが福祉的アプローチなのです。最初のころのＷＩＤというのは、こういう発想だったのです。もちろん、効率的なアプローチというのも、ＷＩＤの中には入っていくわけです。いかに効率よく開発というものを進めていくか。さっき言ったように、低賃金労働者がたくさんいるほうがいい。女性は適任者であるという考え方があるわけです。

これは、女性を一種の社会問題とみる、という視点なのです。そして、女性は特定の領域である、女性という領域である。こういう見方が強いわけです。ＷＩＤ、ＷＩＤというとき、女性は特定のニーズを持ったグループであり、そのニーズは女性に特有のものである。したがって、女性は問題を持っているターゲットであり、１つの領域である、という捉え方をするわけです。

それに対して、ジェンダー・アンド・ディベロップメントというのは、ジェンダー、つまり社会的、文化的に作られた性、あるいはその両者の関係、特にこの関係性に注

目するわけです。これは、女性の地位を向上させるということが、重要なファクターになってくる。女性の地位を向上させるということは、どういうことかというと、女性をエンパワーするという言い方をするのです。女性に力を付けるということです。エンパワーするということはどういうことかというと、自己決定権を女性が持てる状態、これがエンパワーされた状態だ、というふうに言うわけです。つまりは、女性がどんなに稼いでも、稼ぎはあるのだが、そのお金の使い方について女性が決定権を持たない、というのはエンパワーされている状態ではないということです。ですから、女性が自分の生き方についての決定権を持てる状態が、エンパワーされた状態だということです。そして、こういうのをエンパワーメント・アプローチというふうに言うわけです。

ＧＡＤとＷＩＤとの違いはどういうところにあるかというと、ＧＡＤは基本的には、女性のエンパワーメントを目標にしているということです。そして、人口とか貧困とか環境とか、そういった個別領域の１つとしての女性ではなくて、それらの領域へのパースペクティブであるというのが、このジェンダーの視点だということです。このことをベースにして、開発のデザインを考えるということが、エンパワーメント・アプローチであるということなのです。では、これから開発というものを、どういう視点で行ったらいいかというと、これは難しいわけですが、取りあえずは経済開発中心ではなく、ヒューマン・クライテリアとか、ソーシャル・クライテリアということを基準にして考える、ということのほうが、いままでの問題を、少しでも是正する方向に導くのではないか、と思うわけです。

女性たちが、開発の視点とか方法を再考する際に、どういうことを言っているかというと、いろいろなことを言っているわけです。女性たちは１つになってない、いろいろな考え方があるわけです。例えば、その戦略の１つとして、インサイダーになるというのもあるわけです。つまり、インサイダーというのは、男性の作った仕組みの中に、女性も入っていく。女性が入っていくことによって、決定サークルに入る。そして女性たちも一緒に決定をするというのが、インサイダー・ストラテジーということなのだそうです。それに対してアウトサイダーでいるということは、男性が作った

権力構造の仕組みの中に入らない、その外にいるままで、男性の作った仕組みにチャレンジをしていく。これがアウトサイダー戦略だと言われているようです。

3番目が、オールタナティブ・ストラテジーだというのですが、それは全然具体的なものがないわけです。まだ全然見えていない。一部、3番目の方法をとろうという人々もいるようですが、まだ具体的な形で、どういうデザインが考えられるかということは、出てきていないように思います。いまの状況は、こういったところでして、結局ウィメン・イン・ディベロップメントからジェンダー・アンド・ディベロップメントの考え方への移行というのが、いわゆるＷＩＤの流れだというふうに言っていいと思います。

一応、このくらいにしておきまして、あとは是非いろいろなコメントをいただきながら、一緒に考えていきたいと思いますが、いかがでしょうか。

質 疑 応 答

【司会】　目黒先生、どうもありがとうございました。ＷＩＤに関しての非常に新しい考え方といいますか、見馴れない用語が意外と多く、そういったものをうまく整理していただいて大変ありがたく思います。目黒先生からご提案があったように、ご意見、ご質問を参会されている方からお受けしたいと思いますので、是非お願いいたします。

【質問】　いつもいろいろご指導いただいてありがとうございます。まだ私の頭の中はＧＡＤまでいってないのですが、ＷＩＤについては、私は直接事業には関与していませんが、予算等で議論をする場合に、力を入れなければいけないということで、かなり新しい項目をいろいろやっております。ただ、ある事業を始めて、これはＷＩＤ関連事業だというタイトルを付けるのですが、それを後で評価する場合、こういう事業をやってどうだったのか、という評価の基準がよくわからないわけです。さらに、エンパワーメント・アプローチみたいになると、そのエンパワーメントというのがどの程度達成されたのかというのは、どうやって評価するのか。あるいは、さっきも女性の地位が二重構造のために、むしろ下がったとおっしゃいましたが、下がったとか上がったというのは、一体何を基準にして、下がった上がったというのか。そこのところのある程度の尺度といいますか、それをどう考えたらいいのか、そこが最後になるといつもわからなくなってしまうのですが。

【目黒】　尺度がはっきりしていると、いちばん簡単なのですが、例えば地位が下がったというとき、具体的にはアジアでもそうですが、特にアフリカでは顕著に見られるのは、女性が持っていた土地の所有権が失われるということがあります。これは、アフリカ地域では、あちこちで見られたことなのです。また、アフリカの特定の地域ですと、女性は所有権を持たなかったけれども、全く自由な土地へのアクセスがあった。つまり、土地の使用権というのを持っていた。だから女性は、そこで作物を耕して、子供たちを養う作物を手に入れることができた。とこ

ろが、開発という名の下に、中央政府からいろいろな施策が出てきて、結局その使用権は女性にはやらない、男性の許可を得なければならない、というふうな仕組みができてきた。実際にそういう所がたくさんあったわけです。女性は、土地の使用権を男性に断らなければならない。その際に、豊かな土地が使えるのか、そうでない土地が使えるのかで、その生産性はもちろん違うわけです。そういうことで、女性がだんだん不利な状況に置かれていった。これは、私の知る限りで、非常に具体的な事例だと思います。アフリカ研究をやっている人は、この所有権と使用権の有無を、ものすごく重要視しています。

やはり、先日、日本に来ていて私も随分話をし、またＪＩＣＡにも国総研セミナーの講師として来てお話をされたジーン・クープマンというアフリカ研究者の研究によると、彼女が携わったプロジェクトにおける経験からも、女性のインカム・ジェネレーション・アクティビティースというのをやったほうがいいという話がありました。女性たちが、とにかくいろいろな形で労働をして、そこから収入を得る。作物を作って、それを売ったりしてお金を手に入れる。そうすると、男性たちは、彼女たちがお金を手に入れてやっているからというので、自分の役割を果たさない。場合によっては、自分の手に入れた収入は、どこかほかに行って女をつくって使ってしまう。家を放棄して行ってしまい、お金がなくなったらまた家に帰って来る、というふうなことをやるというわけです。女性たちは、女性の中だけでいると、非常に活発に議論をし、知恵を出して積極的な活動をしようとするけれども、男性と一緒にいると、慣習によるというのでしょうか、あるいは権力構造の仕組みがそうなっているのか、とにかく一切口を開かない、というようなことがある。女性たちだけでやると、かなり効果が上がるような活動をやる。

その活動によって彼女たちは、子供たちに十分な食べ物を食べさせ、自分たちは生き延びることができるけれども、それ以上発展しない。つまり夫婦関係を変えるとか、夫と妻の間のジェンダー関係を変える、というところまでは全くいかないというわけです。そうなりますと、収入があっても、女性はエンパワーされ

たことにはならない、という構図になるわけです。しかし、収入がないときに比べたら、生活状況は良いわけです。子供たちも、より良い条件で育てられるということがあるから、これは否定されるものではないわけです。ジェンダー・アプローチというのが出てきたから、全部ジェンダー・アプローチにするなどと言っても、それはあまり意味のないことで、実際にどういうニーズがそこにあるによって、これはＷＩＤアプローチでもやむを得ない、というのがいっぱいあるわけです。

ただ、私などが感じるのは、例えば母子保健という考え方をとったときに、全体の枠組みにはノータッチなのです。そこだけで、良い環境を作る。だから衛生のレベルが上がったとか、それで子供の死亡率が減ったとか、妊産婦死亡率が減ったという、これは非常に望ましい状況なのです。しかし、それをずっと押し進めていくだけでは、その構造は変わらないから、そのサポートをやめたら、いつ元に戻るかという心配が常にあるわけです。女性たち自身で、母子保健とか、母子衛生を進めようということが、積極的にできるような仕組みづくりをする、というのが開発であると考えるのが、ジェンダー・アプローチなのです。女性たちが実際にそういうことができる状態になったならば、サポートをする側も負担が少なくなるわけです。また「女性たち」のという、そこだけではなくて、一緒にいる男性たちにとっても、生活状況が良くなるわけです。ですから、具体的には女性をターゲットにしてやるプロジェクトであっても、発想として、全体の地域の状況が良くなるということを念頭に置いているか、母子保健だから、母子だけでいい、衛生条件が良くなって、乳幼児死亡率が減って、というふうな考えだけでいくかで、ものすごく大きな違いが出てくる、というふうに思うわけです。

女性の地位向上とか、その権力構造がどうなっているかと言うと、何かフェミニストがわあわあ騒いでいるということで、「あれは話にならん」というふうな印象を与えがちなのですが、実際はこういうことなのです。つまり、こういうジェンダー・アプローチをすることによって、具体的なターゲットとなっている母子衛生の状況も良くなる、という捉え方なのです。

具体的な指標といいますと、なかなか難しいのですが、１つには、女性が経済力を持つ、ということがあるわけです。最も具体的な形として、経済力というのは見えるわけです。女性が経済力を持ったら、それでエンパワーされたかというと、「はい、エンパワーされました」ということは言えるわけです。その前の状況に比べたら、エンパワーされている。でも、それでいいのかと言ったら、その収入の得方、収入の使い方については、従来どおりの仕組みの中にしか見られない。決定権がその女性にあるかどうか、ということが問題なわけですから。そういうふうに見るわけです。

プロジェクトを組むときに、最初からそういうフレームで組んでおけば、評価基準というのも、何らかの形で最初に出てくるわけです。私が考えるのは、デザインをするときに、評価基準というのは、当然そこにあるはずなのです。いままであった基準とは、経済的な発展ということで、ＧＮＰがどうだとか、地域レベルだと、衛生状況が、乳児死亡率何パーセントから何パーセントに減ったとか、こういうことなのです。そこにジェンダー関係という、人間が長い歴史の中で作ってきた関係の在り方を変えないと、実際に特定のターゲットのところで、成果を上げようとしても上がりませんということが、いままでの経験から判ってきたということです。

エンパワーとはどういうことかというと、非常に極端な形で示してみますと、上が決定権を100％持っている人、決定権を100％持っていない人、０％の人が下に位置するとします。女性のエンパワーメントとはどういうことかというと、少しでも決定権線を上げようとするわけです。この線が50％までくれば、これは平等になります。だから、エンパワーをするということは、女性の決定権がこの低い位置からこっちの高い位置に移行することだと。そのときに、決定権線は移動するわけですから、結局高い決定権を持っていた男性からみると、決定権のパーセンテージは下がるわけです。ゼロ・サム・ゲーム、これは相対的な関係なのです。ノンゼロ・サムでやってしまうと、こういうふうにならないのです。男と女の関係というのは、ゼロ・サム・ゲームです。だから、個人的な関係だと、ここ

に非常にややこしいセクショアリティが入ってきて、好きだの嫌いだのというのが入ってくるのですが、そういうことではなくて、女性がこのボトムにいるのをここまで上げる、ここのプロセスがエンパワーメントなわけです。そのときに、男性はここに下がっている。こういう言い方をしてしまえば、こんなのは面白くない、もう味も素っ気もないわけです。でも、こういうふうな状態になったときに、どんなメリットがあるかということを考えるのが、このアプローチをとるときの成功のカギになるわけです。

例えば、最近の若い男の子などを見ていますと、「就職がどうしてこんなに大変なんだろう」と言うわけです。今年は、特に女子大生は大変なわけですが、もう何年も前から男子は言っていたのです。「女はいいな、就職できなかったら結婚に逃げ込めるからいいな」というようなことを、しきりに言っているわけです。「じゃあ、こういうような関係にしたらどう」と。この位置にいるから家族を養わなければならない、という、ほかのものが入ってくるわけです。ここにきたら、そういうのはオブリゲーションではなくなる、というふうに考えたら楽なわけです。家族を養うというオブリゲーションによって、さまざまなメリットがあるから、ここから下りたくない。女性も、もちろんこっちに上がってくると、いろいろないままで持たなかったような責任を、当然負うことになります。それでも、それがいいと言う。多くの女性たちが願っているのは、この平等を願うという動きなのです。相対的な関係、バランスの関係ですから、両方が高い所にはいられないわけです。

開発は、パイを大きくすることで、あらゆるヒューマン・ファクターにとって、以前よりは良い状況が生まれるという理論があったわけです。パイが大きくなるということは、この構造が全然変わらないままで、パイがいくらでも大きくなる。だから、こちらにいる人たちの配分がむしろ大きくなったということで、パイ全体は大きくなったけれども、こちらのほうの取り分がもっと増えたから、こっちのほうが以前と相対的に比較したならば、状況が悪化したということも言えるわけです。つまり、パイ全体が大きくなったときに、それぞれの取り分の配分率に

差が生じた。そういうことがあって、女性の地位の低下が生じたと言えるわけです。

具体的な基準という質問に対して、答えがますます抽象的になってしまいましたが、理屈としてはそういうことになるのです。どうやってその尺度を考えるかというと、やはり最初のデザインのときに、それは考えられるはずなのです。最初のデザインのときに、何を目的に開発デザインを考えるか、ということを明確にする。いちばん単純なのは、ＧＮＰとか、何らかの数値目標を立てる、アメリカの好きな数値目標を立てる。その数値が達成されれば、これはうまくいった、ということが理屈では言えるわけです。しかし、その目標の立て方が問題だったら、その数値目標は達成されても、ほかの面で一体何なんだ、ということになってくるのです。

結局、いちばんの問題点は、公正の原理がどこまで貫かれているかということだろうと思うのです。私が何回も繰り返し言うように、「誰にとっての」ということなのです。そのときに、当然プライオリティがあるわけですから、まず今のナショナル・ディベロップメントのレベルだと、男性にとってのメリットを考えるのが優先的である。あるいは企業にとっての利益を優先させる、というふうに考えていってしまうと、ではここから、それぞれジェンダー・イッシューを考えましょうと言っても、なかなか難しいわけです。

これは、私の個人的な考えですが、何で日本がここまで経済成長をしたのに、こんな男女平等だの何だのということを、今もって問題にしなければならないかといったら、経済成長をするようなデザインの中で、ジェンダー・ギャップというのが全然埋まらないような仕組みを考えてきた。そのほうが効率が良かったから、ということになるわけです。ですから、途上国の場合には、経済成長そのものはスローでも、ほかが公正の原理が貫かれるような形で、ゆっくり開発を考えていったほうが、いろいろな問題が同時に解決していく方法ではないかということで、結局ヒューマン・アンド・ソーシャル・ファクター・クライテリアというものを基準に、優先的に考えるのが、これからではないかということなのです。

【質問】　どうもありがとうございました。いま、久しぶりにものを考えさせていただいたのですが、ＷＩＤの考え方というのは、経済開発の理論の世界の話のように思うのです。ですから、経済開発を進めるにあたって忘れられている、あるいはニグレクトされている、あるいは不利な立場にある女性を、かわいそうな女性を救うとか、女性にもっと積極的に役割を与えて、経済開発をさらに進めていくとか、そういうことを女性の面に当てていく。でも、これはあくまでも経済開発のための手段というか、そういう中の１つのエレメントとして、大きな開発理論の中で考えている。ところがＧＡＤは、開発理論の世界の外の話なのでしょうか。何かそんな気もするし、一定の経済開発の段階に到達した後に起きてくる問題で、開発とは別の世界の話のような気もしますし、あるいはこれも開発理論全体の中での話なのか、私がちょっといま聞いた印象では、どうも別世界といいますか、開発理論の世界の話ではない。すなわち、経済開発をすれば、すべてうまくいくはずだという前提の中で、いままでの議論でやっていくと、女性はどうも不利な立場になる。これではいけない、ＷＩＤの考えで女性にパイのできるだけ多くをやっていこうということではなく、経済開発が目的ではない別の世界、すなわち女性の地位を高めるということは、経済開発とは関係なく人類のために良いことなんだという、全く開発理論の世界とは違った理論が、開発の問題、理論の１つであるかのごとき姿をもって語られているのか、その辺はどうなのでしょうか。

【目黒】　私のプレゼンテーションの仕方が不十分で、そういう誤解があったのでしょうか。多分、ＧＡＤの話になると、そういう印象をあちこちで受けられると思うのです。でも、そうではないのです。開発へのアプローチとして、ＧＡＤアプローチというのが重要だということですから、開発のアプローチの重要な１つだということなのです。女性の地位向上を最終目標に考えると、これは社会の仕組みを変えるということなのです。ですけれども、経済開発だけを考えたときに、社会の仕組みを変えることなしに、それがうまくいくだろうかという疑問が、いままでの経験から出てきているという事実に基づくわけです。

数値目標で、「ああ、やった、やった」と言えるような形でだけの経済開発をやって、それで問題がないのならば、多分ＧＡＤアプローチなどは、出てくる必要性もなかったかもしれない。でも、こういうものが出てくる必然性というのは、経済開発だけを中心にやってきて、一体我々はどこに到達したのだろう、という反省に立っているから、こういうものが入ってきたということなのです。少なくとも、私はそういうふうに理解しているし、こういうことを言っている人たちは、みんなそのつもりで言っているのですが、ただ最終目標が何かといったときに、開発に関心のある人は開発ですね。いわゆる男女平等と言っている人たちは、男女平等の達成が最終目標です。

まるで違っていることを言っているように見えるわけですが、開発を達成するためには、このＧＡＤアプローチがＷＩＤアプローチよりも、もっと有効なんだということを言うわけです。なぜそんなことが言えるか。経済開発というけれど、どういう状態になったら経済が開発されたと言えるのだろうか。また、開発といっても、経済開発だけではないというのがもちろんあるわけです。ほかの側面での開発とは何か、例えば社会開発だと。社会開発とは何かを考えるとき、不平等な構造を変えることなしには考えられないわけです。つまり、分配の公正ということが基本に出てくるわけです。

女性のエンパワーメントというアプローチをとることによって、女性だけでなく、弱者全体のニーズを中心にしたアプローチがとられるということなのです。女性は、最も多数派の弱者である。ほかの弱者のカテゴリーというと、例えば障害者だとか、あるいは高齢者だとか、病人だとか、いろいろな弱者集団があるわけです。しかし、女性への配慮、あるいは女性のニーズということを考えたときに、ほかの弱者集団のニーズは、当然入ってくるのです。女性、女性というと全く別枠のような印象を与えやすいかもしれませんが、意思決定にいままで参加してこなかった人々のニーズを、もっと積極的に反映させるデザインがＧＡＤアプローチだと。なぜならば、ディストリビューティブ・ジャスティスということを考えたときに、その権力構造の仕組みそのものを変えなければ、配分率というの

は変わらないからです。

【質問】　具体的に事業をやっていく上で、ＷＩＤの、要するに女性の配慮というのは、具体的事例で申しますと、例えば人口の爆発を抑えるという目的でのプログラムを組む場合でも、人口増加の最大の原因になっているのは何かというと、もちろん女性がいて子供を産むからでありますが、統計的に見ますと、非常に人口生産率が高いのは、貧困層の女性に多い。これはなぜかというと、要するに貧困層の女性は、自分のサバイバルの手段として、子供を多く持つことによって、自分の生活を支えていくという見方が１つある。もう一方では、非常に保健医療のレベルが低いということで、乳児の死亡率も高い。したがって、それを担保するためにたくさん産む。したがって、貧困層の女性が多く子供を抱えている。したがって、人口問題１つを考えるにしても、貧困層の女性が、子供を持たずに安心してサバイバルできる手段は何か、という視点で開発プログラムを組む、ということが新しいアプローチである、というのがウィメン・イン・デベロップメント的アプローチというふうに理解しておりましたが、こういう考え方では駄目で、さらに女性の地位の向上ということを、最終目的にしたプログラムを組まなければいけない、ということになるのでしょうか。ちょっとその辺がよくわかりませんので、お教えいただきたい。

【目黒】　いま、とても良い例を挙げてくださったと思います。まさに、おっしゃるとおり、かつては人口計画、家族計画というと、女性の身体を対象にして、いろいろな方法を用いて、やれという形できていたわけです。それが、いまおっしゃったように、女性のサバイバルの担保というのが、ほかの形でバックアップされるようになれば、何もそんなにたくさん子供を産まなくてもいいから、そこで人口抑制ができる。これは、非常に重要なアプローチなのです。それがＷＩＤアプローチかといいますと、女性の状況が良くなって、老後の生活の保障を、子供に求めるということをしなくてもいいとなると、これは男性にとっても同じメリットがあるわけです。つまり、女性だけのものではないわけです。そういう発想自体はＧＡＤなのです。それなのに、女性だけを対象にして考えるところが

ＷＩＤの発想なのです。子供を担保に考えなくてもいいような社会システムづくりという、こんな素晴らしい目標を掲げるのだったら、そのターゲットを女性だけになぜしぼるのか、という疑問が出てくるのが、ＧＡＤアプローチからだと思うのです。

エジプトならエジプトの国全体でやるのは、宗教の問題とか、いろいろなことが絡んできますから、それをやるのは大変でしょう。しかし、特定のコミュニティでそれをやろうといった場合には、男性も当然対象にし得るわけです。担保にと考える場合でも、女性は産みたくて産んでいるわけではない。結局、いろいろな形で男性からのプレッシャーがあるわけです。いまカイロでやっている会議の大きなイッシューなのですが、妊娠について、出産について、あるいは出産の間隔について、数について、女性は決定権を持たない、という所があまりにも多いわけです。その決定権を女性が持つ、という仕組みが女性のエンパワーメントなのです。先ほどの具体的な指標という問いに対する答えにもなるかと思うのですが、出産に関する決定権を女性が持つ、というのは重要なファクターになる。これは、もうＧＡＤなのです。女性だけを対象にする、という発想自体から抜け出て、男女の問題だ、というふうにくればＧＡＤなのです。女性が決定権を持つということは、女性のエンパワーメントの１つの形なのです。リプロダクティブ・ヘルスとか、リプロダクティブ・ライツというのは、そういうことを言っているのだと思います。

【質問】 これからの問題として、「開発の視点・方法を考え直す」という最後の項目で先生がおっしゃったのは、最初に、インサイダーになってディシジョン・メーキングに参画する、というやり方。２番目に、男性支配の構造の外側にいてそれにチャレンジする、という生き方。第３に、オールタナティブ・ストラテジーというのがあるということで、これについては先生もはっきりおっしゃらなかったと思うのですが、いろいろ新しいプロジェクトなどをやっていくときには、ここが非常に問題になると思うのです。

私は、最近までネパールにおりましたが、新しいプロジェクトがもうすでに始

まっているのです。この中のいちばんの眼目になるのは、大きいほうから言いますと、「村落開発を通じての自然環境と森林の保全」ということになって、まずは村落レベルで、村落開発をする。その村落が持っている問題を開発しなければ、そこの住民の関心も、森林や環境の保全には向かってこないだろうということで、まず村落開発をやる。これは、青年海外協力隊のプロジェクトが、村落レベルの活動を担当し、それを技協のプロジェクトがサポートする。さらに、村落レベルを超えた、より広域な問題も、技協のプロジェクトが解決に当たる、という行動をとっているのですが、具体的にニーズをとらえてみますと、２種類出てくるのです。

１つは、切実ニーズというもので、飲料水が足りないとか、食糧が足りない、家畜の餌が足りないとか、薪を取る距離が長くなって非常に苦労するとか、そういう問題です。もう１つの憧れニーズというのは、自動車道路が欲しいとか、電気が欲しいとかというのがあるわけです。やり方としては、１つの村落のコンセンサスとして、１から10までニーズを、優先順位を付けて数えあげてもらって、その中の上位５つのニーズについて、その村落の住民がイニシアティブをとってやる仕事を援助しようと、こういう仕組みにしているのですが、やはり切実ニーズというのは、先ほどから出ているサバイバルの問題なのです。そのサバイバルの問題というのは、みんな女性、女と子供、階層の低い所に関係が出てくるわけです。

いままで、ネパール辺りでも、各国の援助が入って、いろいろ森林保全とか、環境保全ということをやっているのですが、あまり上手くいっていない。その１つの原因は、やはり村落の住民にアプローチするときに、アッパースラタ、山村社会の上層部にアプローチしているのです。山村社会のインテリとか、権力というほどのことでもないと思いますが、力を持っている有力者、そういう人間にアプローチすると、いい答えが返ってきたりするけれども、実際にそういう人間は、森林の利用とか、水とかその他の天然資源の利用にはタッチしない。その辺のギャップが非常に大きかったわけです。

これからやっていくときに、例えば10のニーズを調べあげて、上位５つをとってみた場合に、どうやっていったらいいか。特にジェンダー・イッシューとして、それを頭から持ち込むのではなく、コンセンサスで決めてもらったときに、そういう実際の森林の利用者であるとか、水その他の天然資源の利用者の問題が出てなかった場合には、「これはいいんですか」という程度のチェックでいいのではないかと思っているわけです。初めから社会的弱者、女性、子供、ローカーストを含めた社会的弱者を助けるんだというような意味を強く持っていくよりは、むしろ村落のコンセンサスとして出てくるものに、あまりそれが入ってない場合には反問する、というようなところでいこうかと思っているのですが、こういうことについて何かご意見がありましたら伺いたいと思います。

【目黒】 そこのところでいろいろな判断があると思うのです。住民のコンセンサスをどういう形でとったかとか、ニーズ調査のやり方が１つチェック・ポイントになると思うのです。誰の意見か、住民みんなの意見であっても、どういう状況でその意見表明が見られたか。つまり、何らかのプレッシャーがあって意見表明をしたのならば、それは本当のニーズではないかもしれないということを、まず考えなければいけないと思うのです。もし、本当のニーズが表明されているとして、上のほうからとっていって、ジェンダー絡みのものが出てこない。だったら、もうそのままで行こうというときに、やはりいま言ったようなニーズ調査の方法をもう一回考え直すというのが、私は重要なところだと思うのです。

【質問】 ちょっとその点、説明が足りなかったと思うのですが、ネパール山村社会は、いろいろエスニック・グループが違ったり、宗教が違ったり、そういう違いがあるのですが、１つ良い慣習があるのです。それは、みんなが日向に出て来て、議論をして決めるのです。ただその場合に、ややもすると女は別のグループを作りがちだ、という指摘があるのです。男が集まって１グループで議論をして決める。その外側に女の輪ができて、それで女の話になる。その女のグループのほうの結論が、なかなか全体に反映されにくい場合がある。そこを注意して、そのニーズの決定を、山村社会、その村落のコンセンサスとしてまとめて出す、と

いうことをしているのです。

【目黒】　コミュニティ開発を考えるときに、やはり、いかに維持するか。生活の環境づくりですから、いかに持続するかというところが問題になりますね。その持続させるところで重要な役割を担っているのが誰かといったら、日常生活において女性が担っている役割を考えたら、女性を抜かすことはできないはずです。そうすると、女性の持っている具体的なニーズが出てこないはずがない、と私は思うのです。だから、それをいかに汲み上げるかということで判断する、というのがあると思うのです。やはり、女性は女性だけで、男性と別個で意見を出すというふうになりますと、そこにある男性と女性の関係がそこに反映してきますから、どうしても女性の意見というのが後ろにいってしまいがちです。そのときには、例えば渡辺リーダーが、デザインに責任があるというときには、そこで一歩踏み出す。ここが日本政府のやり方からはみ出すかもしれないのですが、一歩出て、やはりジェンダー・イッシューとして何があるかということをチェックする、ということをやらないと、やはり地域生活における、しかも持続可能な開発というのは、考えられないのではないかと思うのです。

何も、これはジェンダー・イッシューが前面にある立場でこんなことを言っているのではなくて、実際問題、持続性ということを考えたときに、コミュニティ・キーパーというのは女性なのです。そうであるという状態について、多くの人たちは、それはおかしいということを言っているのですが、おかしいと言う言わないは別にしまして、実際問題、サバイバルを最優先させなければならないような人々が置かれた状況というのは、やはりコミュニティ生活を担っているのは、大半が女性だということなのです。だから、女性というファクターが出てこないはずはないと思います。見えにくかったら、一歩踏み込んで捉える、ということをやってもいいと思います。それはＪＩＣＡの方針と合わないかもしれませんが、やはりそこのところの努力といいますか、出てきたものをそのまま受け入れていいものかどうか、という疑問を常に持ったほうがいいのではないかと思います。

【質問】　あまり違ったことを言ってないと思うのです。確かに、すんなり取りますと、女性関連技術というのがいちばん多いのです。ただ、それがすんなり出てこなかった場合にだけチェックして、あとは大体そのまま受け入れても、女性の生活の改善であるとか、その集落自体のサバイバルの問題がなおざりにされる、ということはないと思うのです。ちなみに、２つの技協のプロジェクトとＪＯＣＶのプロジェクトを合同で運営しようということになっているのですが、主役のほうのＪＯＣＶのプロジェクトの隊員は、10人行くことになっているうち、６人が女性なのです。私は、その逆ぐらいの割合かなと思っていたのですが、やはり女性の関心が非常に高かったようです。

もう１つは、技協のプロジェクトも、これはネパール政府の方針で数を減らされまして、いまリーダー、調整員を含めて４人しか専門家はいないのですが、そのうちの１人の、タイトルがＷＩＤになっています。ＧＡＤにしたほうがいいのかもしれませんが、その方はご存じの田中由美子専門員です。ですから、そういう配慮では、将来とも心配はしてないのですが、これから具体的にどういう集落的なニーズの取上げ方をやっていったらいいかというようなことは、議論しながらやっていくということで、私もあと半年ほど、お手伝いに行くことにしております。

【目黒】　ありがとうございました。いまのケースは、ＷＩＤではなくて、いわゆる報告書で言えばＷＩＤインテグレーティッドの典型的な例になると思います。ＷＩＤインテグレーティッドというのが、実はこのＧＡＤだというふうに言ってもいいんじゃないかと思います。

【質問】　いま私は、渡辺専門員から話がありました村落開発普及ということをやっています。協力隊はご存じのように、村落開発普及員をかなり多く募集しています。応募者の中にも、非常に女性が増えてきています。我々は、ビレージ・デイベロップメントとかいうような言い方で言っていると、相手は一体何をするあれだというようなことで、なかなか理解が十分ではないということがありますし、応募者のほうの経歴を見ていますと、結局どういうことをやればいいかがわから

ない。ただ、非常に語学力が優れているとか、非常に人柄がいいとかいうような若い方々が多いのです。そういう人たちに、どういう事前の研修をすればいいかということを考えまして、ＷＩＤ関連のいろいろな本を読んでいったわけです。

これは何人かの方からアドバイスをいただいたのですが、日本の農村で生活改善普及をやっていたわけで、これは昭和２３年ぐらいからの歴史があるわけですが、ずっと日本の農漁村の生活改善に取り組んでいた人たちの経験を、特にどういう苦労があったかとか、どんな失敗があったかとか、どういう形でそういう村落に入って行けばいいかとか、いろいろ経験者に語ってもらって、その中でいくつかの基準というか、指針を出そうということで、１週間ほどにわたってやるような計画をしているのです。ただ、実際にＷＩＤだからこうだとか、ほかの国がどういうことをやっているかといったことについて、我々は十分オリエンテーションができていません。そのほかの国で、いわゆる村落開発普及とかいう分野で、ＷＩＤとの関連でどういう動きがあるのか、ちょっと教えていただければと思うのです。

【目黒】　そういう具体的な動きについては、むしろ専門員の田中由美子さんなどのほうが情報を持っていると思うのですが。日本の村落改善事業は、占領軍が中心になって始めたわけですね。あのときの占領軍の政策というのは、日本では女性の地位を向上させることが、日本社会の発展にとって不可欠だという考えを持って、とにかく生活状況の悪い所から改善していこう、特に農村で、台所が暗くて効率が悪い、腰を曲げたりして健康上よくない、炊事にも時間がかかるとか、いろいろなことがあって台所の改善を進めたと聞いているわけです。最初は、なかなかお嫁さんたちを連れ出して話をするのが難しかったけれど、だんだんそれができる方法を発見したとか、いろいろあるわけです。占領軍の意図は、まさに女性の地位向上を同時にやる、ということがあったわけですが、日本の農村のその後を見ていますと、女の領域の台所を改善した、女の人たちにとっては、確かに生活環境は良くなった。しかし、女の人たちが台所から解放されたわけではないですね。あるいは台所に男が入ってくるということもなかったわけです。そこが

ＷＩＤかＧＡＤかの分かれ目だと私は思うわけです。

表面上は、女性の地位どうこうと言わなくてもいいのです。全然そんなことは言わなくていいし、言わないほうがいい国のほうが多いかもしれません。そんなことは取っておいて、結局、女性の労働負担が重くならないということを念頭に置くとか、労働が増えるならば、一方的に女性に集中しないような、いろいろなところで男性にも労働負担がいくと、それは男性問題でもあるわけだから、一緒になって労働過重にならないようなシステムづくりを考えよう、ということにいくはずなのです。ＷＩＤスペシフィックとＷＩＤインテグレーティッドあるいはＧＡＤのアプローチの違いは、そこのところなんです。

だから、どういうふうに取り込んだらいいかということは、もうその社会、社会によって全く違うと思うのです。いちばん良い方法は、まず知らない所に行ったら、調査の手順としては、いいインフォーマントを見つけることだと思うのです。誰がいちばんその社会についての情報を持っている人か。外の者がパッと行って、「あなたは何が欲しいですか、何を考えていますか」と言っても、口を開きっこないですね。だから、いいインフォーマントを見つけること、それは役人だけではいけない、為政者だけではいけない。いろいろなことを知っているいいインフォーマント、できればいろんな立場に立った情報が得られるような、そういういいインフォーマントを手に入れるというのが、未知の社会に行ったときの調査方法としては、常套手段だと思います。

【質問】 この間、無償労働という話があって、要するに農村の婦人が自分で管理できる口座を作りなさい、という話があったのです。自分がキャッシュを手に入れることができれば、例えば子供の教育費だとか、自分の好きなことに使える。自分のお金を持つことを、まずやりましょうという話になったのです。

【目黒】 それは、日本でもそんなに昔の話じゃないのです。家庭の主婦が、自分名義の口座を持つようになったのは、10年ぐらい前からではないでしょうか。それは、とてもいいアプローチだと思います。ただ口座を持って、自分のお金のマネージが自分でできるというだけではなくて、お金を管理するという能力トレー

ニングができるということですね。いろんな波及効果があるわけです。こういうことをやったらいいというときに、それだけの効果じゃなくて、波及効果というのが当然あるわけです。結局、言葉としては馴染みがないエンパワーメントというのも、実は自己管理ということです。自己決定するということは、自己管理ができることなのです。ですから、それが育っていくようなやり方だったら、本当に何でもいいと思います。銀行などがない社会で、自分の口座を持ちなさいと言ったって話にならないわけですから、それは行った先の状況次第だと思いますが、でもとてもいい方向ではないかと思います。

もう1つだけ申しますと、何度か出てきた発言ですが、協力隊なり、専門員に女性が増えたからと言いますが、これは意地悪で言うわけではないのですが、女だったら誰でもＧＡＤが判るかというとそうじゃないのです。また、男性でも判る人はたくさんいるわけです。だから、そこのところを十分に考えていただきたい。姿形は関係ないのです。要は、どういう発想かということなのです。女性が増えるということは、非常に日本のイメージにもプラスになると思います。日本の顔は見えないとよく言いますが、特に日本の女性の顔は、外国へ行くと見えませんから、そういう意味でいいと思いますが、いまのようなことをちょっと、本当の老婆心から申し上げておきたいと思います。

【質問】　今日は、貴重なお話をどうもありがとうございました。ＷＩＤとＧＡＤについてなのですが、このペーパーには、ＷＩＤ vs. ＧＡＤと書いてありますが、きっとこれは、ＷＩＤからＧＡＤへ徐々に移行していけばいいのではないかなと思っているのです。途上国では、女性の視点から開発を見るということだけでも、かなり革新的な国もありまして、それを持ち出すだけで何となく男性の権威に盾突くみたいにとられてしまう所もあります。また、ほかのドナーが行っている地位向上を目的としたプロジェクトなんかを見てみても、村に行ってみますと、かなり女性が苦しんでいるという部分もあります。夫が、自分の妻が外に行って何かやっているのが気にくわなくて、家に閉じ込めてしまったりとか、暴力を振うとか、そういう問題に発展している所もあると思いますので、私たちア

ウトサイダーは、慎重に対象地域を見詰めて、どのようなＷＩＤのアプローチなり、ＧＡＤのアプローチをとっていけばいいのかを、相手国の状況に応じて、こちらのアプローチを決めていけばいいのかなと思ったのですが、どう思われますか。

【目黒】　当然そういうことになると思います。外から行った人間が、何だか馴染まないアイディアを持っていって、こうやれああやれというのは、全くうまく進まないやり方だと思うのです。ただ難しいのは、相手の状況を見て、それに合うような形でといったときに、そうすると、いままでどおりの仕組みが変わらないまま、悪くすると、そこに何らかのインプットをすることによって、そのギャップがますます大きくなる、不平等がますます大きくなる、あるいは女性の状況がますます悪くなるということになったら、これは非常に大きな問題ですね。だから、見極めながらやる。これは全く私の独断と偏見の考えですが、もし私がその立場になったらと思うと、その状況はこうである、実際に実行するデザインは、そこから一歩出たものを考えると思います。基本的には、開発援助というのは、お節介することなんです、介入なんです。開発そのものは、変化なのです。だから、変化のない開発なんてないのです。変化が欲しいから開発するわけです。そのときに、言ってみれば受益者が誰でなければならないか、それを公正の原理で考えたときに、どういう方向への変化をこちらが考えるかということが肝心だと思うのです。変化しない開発なんてあり得ないわけです。

変化というのは、外からきっかけを作ってもたらす要素が多い場合もあるし、中でいろんなニーズがあったところへ、たまたまそこへ外から変化の要素が加わり、一気に変化しちゃったという場合もあると思うのです。そのバランスはいろいろだと思うのです。望ましいのは、中から出てくるものに、こちらがサポートするというのがいいのですが、必ずしもそうはいかないという場合には、少なくとも我々が考えて、公正の原理あるいは人権、そういった配慮に立った上で、そこの状況に合ったレベル、プラス１か２か、抵抗のない範囲でデザインしたものを考える、私だったらそういうふうにするかなと思っています。実際にはやらな

い立場ですから、こんな気楽なことが言えるのかもしれませんが、そのくらいでないと、開発をサポートする事業の意味がないと思います。

【司会】　時間がきましたので、特に質問がなければこれで終わらせていただきたいと思います。長時間でしたが、良く整理された話で、非常によくわかりました。参加者の皆様も、本当にお忙しい中、どうもありがとうございました。これで国総研セミナー「ジェンダーと開発について」を終わらせていただきます。

資　　料

Women in Development からGender and Developmentへ

1．背景

国際的動向

開発による女性へのインパクト

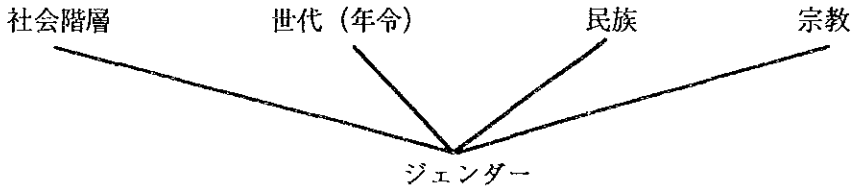
基本概念		
性別役割 性役割	sex role gender role	－生殖 －主婦・家事 育児・稼ぎ手
性別役割分業	平等分業・不平等分業 労働・家族	
ジェンダー階層	分配の不平等による階層化	
階級としての女性	経済的依存と支配	

Globalized Gender Issues

◆生き方・意識
◆開発
◆Sexuality
- Glass Ceiling
- Sexual Harrassment
- 性暴力
- 戦争
- Reproductive Rights & Health

2．開発の目的

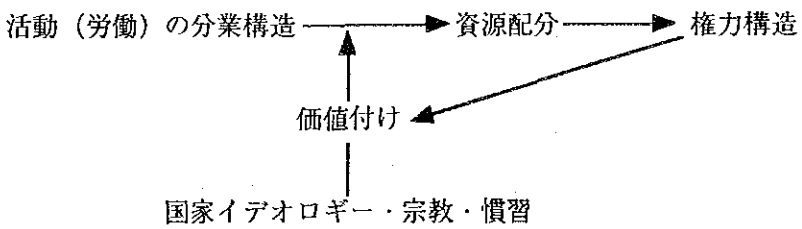
・貧困からの脱却：　どのレベルで；　誰にとって
・受益者は誰か



3．開発の効果

・独立国家の形成と受益集団の優先順位の関係
　特に　エリート　vs.　民衆　　男性　vs.　女性
・コスト　と　報酬：　誰が　どの程度　；　決定者　と　実践者

4．不平等構造



5．労働の分業構造

・性別分業

有償労働	男	・	女	vs.	無償労働	女
生産労働	男	・	女	vs.	再生産労働	女

・再生産活動の多面性：　生物学的再生産
社会的再生産
コミュニティ・マネージネント

6．ジェンダーと開発

ＷＩＤ	vs.	ＧＡＤ
福祉的アプローチ		エンパワーメント・アプローチ
効率的アプローチ		
女性を「問題」とみる；		女性のエンパワーメント；
領域としての女性		人口・貧困などの領域への視点

7．開発の視点・方法の再考

Human and Social Criteriaの優先

JICA